



新規製剤 自己拡散型浮遊粒剤（FG 剤）紹介

(5) FG 剤散布の留意点, 特に水管理

～ピラクロニルはバッチリ、バッチリ LX / デルタアタック、アップレZ、サラブレッド KAI 等に含まれる成分です～

自己拡散型浮遊粒剤（FG）使用の際の留意点は、ジャンボ剤・フロアブル剤など従来の拡散型製剤の注意事項に準じて行うが、特に重要な水管理に関連した留意点について解説する。原理・原則は1キロ粒剤・ジャンボ剤・フロアブル剤にも共通するものである。

(1) 田面に凹凸ができないように均平に耕起・代掻きを行う（第1図）。大規模圃場の場合、均平化の為にレーザーレベラー等を活用する。



第1図 十分に湛水した水田（左）と田面が露出した水田（右）

(2) 水尻は降雨や風の影響で水位が高くなり田面水がオーバーフローすることがあるので、水尻の堰の高さは余裕をもって高くしておく（第2上図）。

(3) 圃場周縁部や水尻部分に漏水が無いことを確認し、あれば適宜補修し水漏れを防ぐ（第2下図）。水漏れが起きると水位の低下が早まり、入水回数が増える。また、漏水により有効成分が流出し、



水口の高さが十分で水漏れの無い鉄壁な水尻



隙間から水漏れ

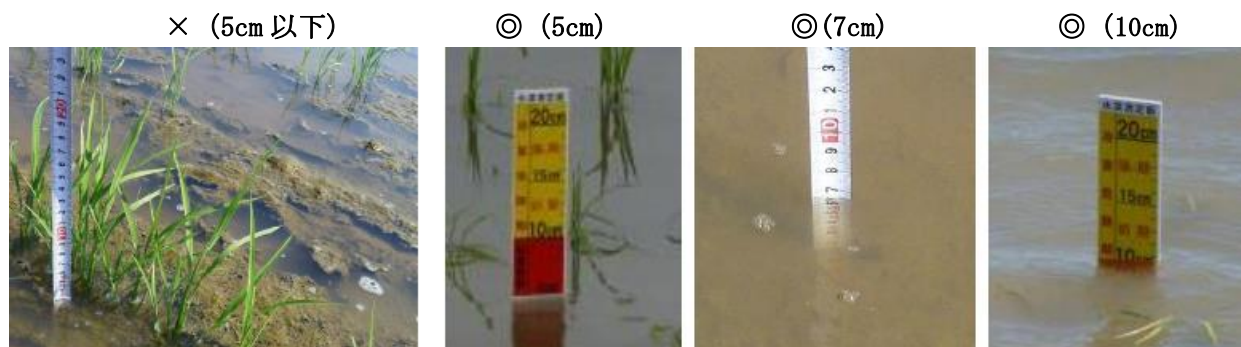
水のオーバーフロー

オーバーフロー寸前の水尻

第2図 問題の無い水尻(上段)と改善の必要な水尻(下段)

効果不足、さらには周辺環境への悪影響の原因ともなる。特に、水尻部分、見た目は問題が無いように見えていても、水漏れの音（水の流れている音）が聞こえていることも多いので（堰板の脇や繋ぎ目等）その場合は、補強が必要。

- (3) 田面が露出した状態で、薬剤を散布すると、薬剤の拡散が十分でなく、処理層が形成されないの
で、除草効果が不十分となる（第1右図）。散布時の水深は5～10cmとし（第3図）、浅い所でも
5cmは確保する。また、散布後も水管理には注意を払い田面が露出しないように、こまめに入水を行
う。また、ザリガニやモグラにより畦畔に穴が開くと、水漏れの原因となるので、それを塞ぐこ
とも重要である。



第3図 FG 散布時の湛水深が不十分な圃場と十分（5～10cm）な圃場

- (4) 散布の際、田面水上に前作の裁断された地上部や根部、藻、表層剥離、アオミドロ、油膜、泡、
微細な葉片、その他ゴミなどがあると FG 剤の拡散が阻害されるので、これを避けて他の所に散
布する。
- (5) 風下側の畦畔側では、前作の裁断された地上部や根部、藻、表層剥離、ゴミなどが大量に吹き寄
せられ、それを放置しておく、イネは水没し、それ自体がイネに生育不良・枯死を引き起こす。
また、除草剤が散布されると、その影響は更に助長され枯死株が増え、欠株面積が大きくなる（第
3図）。このため、これらを除去する。
- (6) その他、薬剤散布前には農薬ラベルをよく読み、使用量、使用時期、使用回数、その他の使用上
の注意事項などを熟読し遵守する。



藻等が集積した風下畦畔

イネの生育不良（左図）

イネの枯死

藻の除去

第3図 風下側に集積した藻等によるイネの生育不良とその対策